

成形圖說

農事部

二

共卅本

特別
= 1
144
2



門二加 /
號 144
卷 2

成形圖說卷之二

目錄

田地

附步法

里程

土宜

隱田



畔塍

白田

畦畛

鹵田

附畝

附沙田

成形圖說卷之二

成形圖說卷之二

農事部 田地類

多登古呂 書紀〇即田地也東鑑ニハ田所ト何モ橋次為茂賜富土郡田所職ト又太平記伯耆卷曰執事田所

ウチケルハ多ト云ク登古呂ト器テ登古トのこつと苗床床仍多ト是あり

志呂 同 古奈多 和名鈔水田の字と訓り又和田ハ仁義多熟田の事なり説文暉音柔和田也

田地 書禹貢〇五篇田土也地也説文樹穀曰田象四口十阡陌之制也正韻土已耕曰田又耕治之謂田

蕃名シイストラント

塩土傳ニ田ハ平也一説ニ平ハ田開の義より出たりと

按子田とハ存水田と主としていふ故子水田と多と割

陸田と波多と割ニ孝徳紀子分割水陸とも又民部式子

陸田水田相交授之とある是今の田畑支配あり○志呂
 てふふとハ舊事紀ヲ將田地佃とあるふと始ふや神功
 卷ノ神田とと又和名鈔ニ淡路國神稻郷とも何處ハ並
 子後ハ神田神戶圭田などいふものあり幣代神代の謂
 たり圭田武蔵風土記麻通利の田と歟後仁德紀田と壑
 あり訓漢の圭田社田とおれ
 あと四萬餘頃とと孝德紀兼并數萬頃田などいふハ頃
 と志呂と訓ふとの始あり和訓栞ニ土左國五十餘萬
 頃海ニ没せしふと書紀ニ足えて土佐傳ある所何せか
 一十町といへり十町即一萬石の地にて吾川郡にあり
 たり是代の義るる一和名鈔ニ頃今之法六町六段二

百四十歩と見えたり畝百為頃とふちがたり蓋同朝廷
 より名代子代とふこと始れたる其代ハ太子諸
 王とくハ皇后の為ニ食封と賜り後ニ其陵邑の守田
 たり元らまゝとは見えぬ守田の事今是神廟何は諸王
 等より海川の支用供給の代として田稻若干と封せら
 せしとの名とぞ見えたり又歌ニ十代田五百代小田など
 詠るハ田の物成の成實ニ就名ありとて今云定代ハ
 足式曰代頭也三十六歩為一段頭一段為一町頭頭ハ
 五六とある頭ニ當一代七坪一二代十四坪二
 三坪三の事あり
 四代廿八坪四五代三十六坪
 六代四十三坪

二寸一畝 七代五十坪二尺四寸 八代五十七坪三尺六寸
 七步余 九代六十四坪四尺八寸 十代七十二坪
 畝 卅代二百十六畝 四十代二百八十八畝 五十代三百
 坪也 右の割りてハ五十代ハ三百六十坪より一段也
 百代ハ七百廿坪二段也 五百代ハ三千六百坪十段也
 千代ハ七千二百坪廿段也 五千代ハ三万六千坪百
 段也 一万代ハ七万二千坪二百段也 五万代ハ三十
 六万坪千段也 十万代ハ七十二万坪二千段也 五十
 万代三百六十万坪万段也 今田家東代西代北代など云
 古事記傳曰代とは崇神紀倭國之物實とは不實也何

又まはる物と指て云今世は代物といふ言此は叶一里
 其と現もくつ物と云ふて灼然と云志呂と曰一里
 薩摩國新田宮藏弘安四年閏七月執達狀其代桑代作
 御年貢以下と云えと此其代桑代其田の物實と云
 孝徳紀曰凡田長三十步廣十二步為段十段為町淡海公
 令曰度地五尺為步三百步為里三代格曰以大方六尺為
 步拾芥抄曰凡田以方六尺為一步といふり此令の一尺
 ハ今の曲尺よりハ一尺二寸よりあつたそのを尺四寸と
 一歩といふといふ格の大方六尺ハ今の曲尺一尺より
 云大ハ八量地尺の事也極小者ハ五尺より尺の不同あれ
 ども地ハ度地ノ実也この五尺より尺の事は其の制大
小尺の事は其の度地ノ実也

元亨二年河内進宮より段反の二字竝一用より拾芥鈔より
 一段為一町頭唐史朱仁軌誨子弟云
終身讓畔不失一段
 一町八十段あり是即三千坪として去六十町を横五十
 間也此五十間の中より十間八道より取らず中央より十間を右
 より田畠間々の割あり十間の道割より細く所隔畔
 路を取ると此十間の取るとハえよりして割取ありいづれも
 十間よりおよびおさぬ空あり又拾芥鈔より十段為一町
 積凡厥一町積三千六百歩也當時於此町積ありしや
 ○麻知は間道小て即町也區訓て町町と蓋間道ハ田中
りつとね同
 往返を冠さの大界と使故に此方の田數町小なりて

極禱の間道と左右脚の界なり 説文田踐處曰町の
集韻田畝謂之町○字彙町田區畔埒又左傳町原
 坊賈逵謂原坊之地九夫為町三町而當一井也按今俗
 畝町ハ訓と以し町段ハ字と以呼つて而歩ハ即亦坪な
 りふふとととと後宮中市上の巷陌と呼て町とつとと
 小田町の義なり后町采女町ふどつふありてそのちい
 さい所とハ小町とつ小野の小町ハ出羽郡司小野良
 實ヶ女より宮中の小町ふん在るれハ呼つて其の草
 紙より小町りみめよく老おとらへてふどつふとハ僻
 大とつとつとの歌よく詠めふとつとつと名ハたか
 時又市防と稱を故を比屋間○田賦集曰吉の田券ハ一
 町幾町くと間道ありと以也
 段と十よ分て其一と一と記し二と川と記し三と川と
 記し四と川と記し五と一と記し六と下と記し七と
 下と記し八と下と記し九と下と記し十と記し十一と
 廣さなる後女よ及て一と一畝りと二畝と號としハ是

三百六十歩一段なまばりハ三十六歩リハ七十二歩分
 ぶ屋一隊ハ是ノ準ム今按ヨリ川ハ即太古ノ在テ一
 二三の文字ナリ後ニ於テ算置の畫トク釋紀大藏省御
 書中有神代字六七枚許トシム之の川乃オトキ古の三
 字アリハと瓊矛拾遺ニ志ルヤリハ一未書契アリ
 ぞおののりり經界乃記辨かくの如くあるべし今又河
 内枚岡泡輪神社の藏土笥ニ鑿トコロ天名地鎮トシ
 之の何の五音字母アリ其字左の如し
 其讀法ハ粗舊事
 親 七人 會 倫 道 善 命 報 七名 顯
 親 兒 倫 元 因 心 顯

子 鍊 忍 君 主 豐 位 臣
 八 一 攻 理 女 私 盗 蠶 勿 男 織 家 田 島 糶 榮 惡
 九 二 絶 宜 蠶 績 照 法 織 家 田 島 糶 榮 惡
 十 三 欲 照 法 織 家 田 島 糶 榮 惡
 百 四 我 法 織 家 田 島 糶 榮 惡
 千 五 剛 守 家 田 島 糶 榮 惡
 万 六 進 榮 惡
 億 七 榮 惡

新井氏曰所謂神代文字者凡五或有其字不可讀者或有
 其體不可辨者或如科斗書者或有如鳥篆者天武之
 世更造新字四十四卷其體如梵書又有肥人書薩人書而
 肥人書一文字昂今猶有通用者古者列國各有其字而異
 其制又曰氏所傳一萬五千三百七十九字乃是灼遺之
 兆猶卦之有文也今按阿奈以知ハ此等の中の一體耳
 成 形 圖 說 卷 之 二

或曰伊勢まで八田一段まで三十束州と稱す是は一所三
 百束まで十五石とある下田も亦さるべし又三越奥羽北
 邊の圃々まで田産を計て何州と云ふ民の志を以て稱す畿
 子州幾万州と云ふは八田四百坪を一反と云ふ是は百州
 として男一人まで五石の地を以て田ありて百州
 より穀二三石と得たり但上下田もて不同ありといへ
 里○西土の畝率を考ふ唐虞夏の三代ハ六尺一步とい
 魯般尺の高ハ五尺即魯般尺の五尺三寸周ハ八尺魯般尺の五尺三寸
 五尺あり尺あり周ハ八尺三分二毛余といへ
 王制云古者以周尺八尺為步今以周尺六尺四寸為步
 陳皓注古者八寸為尺以周尺八尺為步則有六尺四寸今
 以周尺六尺四寸為步則一步有五十二寸是今步古比步
 馬步制出尺二寸八分然と王制ハ蓋漢儒の案とす

所本文及疏義等皆誤あり原發揮の辨しぬるは此は復言也漢志云六尺為步百步
 為畝或作畝後漢趙氏云今以二百四十步為畝古百畝當
 今之四十一畝按趙氏が説ハ秦孝公の制也宋程氏云
之二百金仁山云古所謂畝其廣六尺長六百尺是為一畝
 古者二畝半當今一畝十步司馬法云一舉足曰跬跬三尺
 兩舉足曰步步六尺是ハ人の左右の足と云ふ一足と
 二尺の積り左右を以て一歩あり然とも後世ハ倍々
 尺長くあり今の六尺ハ人の一步より何より二尺よりハ
 梁也故ハ唐六典ハ凡天下之田五尺為步二百四十步
 為畝百畝為頃制度通曰町ハ唐の頃ハ準し段ハ唐の畝

又準して廣狹ありての百歩ハ々の四十一步ありて一
頃ハ此方也五町七段二畝余り也今按お和名鈔と頃今
之法六町六段二百十四歩とありと心しとてさし既と
ありあやり律原發揮曰一夫所受百畝之田 本邦今の
三町七畝三步餘よあり井田九百畝ハ 本邦今の二十
七町六段四畝三步餘よあり是明乃里法よ依て算り也
也獻可録よ司馬法よ歩百と一畝とありハ一畝ハ百坪
百歩ハ一丁坪よありハ二丁坪九百歩ハ九丁坪とて是
昂井田の地取あり是ハ司馬法のの畝率とてとてあ
れ々の田制よあり也今按よ周田百畝ハ斯方の田ありし

て二町四段二畝廿一步余りれば九百畝ハ斯方の田あり
して廿一町八段四畝十六歩あり然とも野田の地取ハ
夏殷周の三代各同しかりはは井田の所よ辯じ濫せ也
了りて終るべし續文献通考云金之田制量田以營造尺
五尺為步闊一步長二百四十歩為畝百畝為頃今按唐六典の
歩法と令荒政要覽角地法云一畝分為四角每角六十歩
也今清國の畝率とあり自方一弓と一歩とあり一弓とあり
ハ昂丈量弓尺の長ありて此方の歩尺五尺五寸なり二
百四十歩と一畝とあり此方の田法ありて五畝七分二厘
七毛八絲有奇とありハ清の一畝とあり 本邦

の五畝算の準を以て朝鮮の畝率ハ大典詞訟類聚云一
等田尺長准周尺四尺七寸七分五厘二等田五尺一寸七
分九厘三等田五尺七寸三厘四等田六尺四寸三分四厘
也とあり

里程二千算學啓蒙里法三百步為里者當以六尺為
步若三百六十步為里者當以五尺為步也

蕃名マイル

成務紀曰隔山河而分國縣隨阡陌以定邑里とは是道里經
界國郡邦域と定られ始る古事記序曰定境開邦又
諸國記七年丁丑定諸州經界とは是あり書紀私記に阡

と豎乃道と訓陌と横乃道とより出雲風土記十字街
あり十字の形を以て為結ぶといつりはハ同毛とつむじ
より和字より十字とつむじと二合さるるを即衢街あり
後子謂過小して四辻四岐高辻等の名亦茲不出る前
食貨志云秦孝公用高鞅壞井田開阡陌注南北曰阡東西曰陌
曰陌○晋書裴秀云國之體有六焉一曰分率所以辨廣輪
之度也二曰準望所以正彼此之體也三曰道里所以定所
由之數也四曰高下五曰方邪六曰迂直三者各因地而
制宜所以校夷險之異也遠近之實定於分率彼此
之實定於道里度數之實定於高下方邪迂直之算孝德紀
曰畿内國郡凡郡以四十里為大郡三十里以下四里以上
為中郡三里為小郡又曰班田收授之法五十戶為里每里
置長一人掌按檢戶口課植農桑禁察非違催驅賦役是郡

里道程の始と終し今ハ廿里以下十六里以上は大郡
十二里以上ハ上郡 八里以上十一里迄ハ中郡 四
里以上七里迄ハ下郡 二里以上三里迄ハ小郡と云々
いつり拾芥鈔曰卅六町為一里卅六里為條條起從北行
於南限卅六條里起從西行於東限卅六里町始良終乾と
條ハ今の鄉村ハ東條西條と云々ハ今ハ路云々十六町
と一里と云々は是始と云々ハ今ハ路云々十六町
五町四方田地の制ハ今ハ奥州多賀碑令式風土記等
の記も所見也按ハ古事記ハ船の餘枝と云々に似て
ハ其音響于七里と云々ハ今ハ路云々十六町一里と云々ハ

の一里ハ一町是らざれば七里の中央ハ居テ四方ハ
今ハ八町七段許多リ又東鑑ハ是利又太郎忠綱ハ呼云々
坂東路間于四十里四十里ハ今の五里二十町計されハ
五里の中央より四方ハ一里十四町と云々ハ今ハ路云々
事ハ太平記新田義貞の受状と云々ハ京都より濃倉まで
の路程と載テ八百里とあり五町一里の八百里ハ今の
六十里ハ町ありと云々ハ相模の七里濱上總乃九十九
里濱と云々と云々故址と云々ハ
本藩大隅福山御七里原又
三十六町為一里と云々四方田地の制ハ今ハ路云々
五町ハ量地尺長されハ後の五町と云々ハ今ハ路云々

むり、此一里ハ今の古所といふと、その付くより、按
仁徳紀四十一年春三月遣紀角宿禰於百濟、始分國郡、壇
場具録、鄉土所出、又天武紀十二年諸王五位伊勢王等巡
行天下、限分諸國之境、堺といひ、凡古の時、東西南北と極
各地形と度、四海と甄て天下の邦域と記し、道里遠近
の碑と建らし、終一と、國史に見え、これと當時の碑文
今に残るもの僅に東陸一二、過されば、其始る所未だ
詳ならず、續紀限伊勢大神宮之界、樹標といふハ、即今の
界木也、經國大典云、東海諸國用日本里、數其十里、准我國
四十里、是信長記云、天文九年冬將軍家より諸國へ仰有

て四十町と一里とし、里、堦乃上、松と櫛と植とあり、
且、奠陰逸史曰、慶長九年二月下令、東海東山北陸、三道每
里置堦、既而西南亦皆依其法、云今里、堦は櫛と植、ハ是
行旅の準望、庇蔭の便、りて此等の、既、後紀、道邊之
木、夏坐蔭、為休息處、といひ、さうり、今是
と並樹と云、漢、街、樾、道、樾、と、呼ぶ、
北史、韋、孝、寬、
為、雍、州、刺、史、先
是路、側一里、置一土、堦、自、孝、寬、臨、州、當、堦、處、植、槐、木、代、之、行
旅、得、庇、蔭、周、文、後、見、之、曰、豈、得、一、州、獨、爾、當、天、下、同、之、於、是
分、諸、州、道、路、一、里、植、一、木、二、海、東、諸、國、記、云、日、本、里、數、と
里、植、二、木、百、里、植、五、木、焉、
擧て其、一里、准、我國、十里、と、是、五十、町、一里、と、いふ、所、少、て
孝徳紀五十戸、為里、と、始、り、也、慶長九年より定て三十六

邦一里 一萬二千九百六十尺 清六里百九十六步二尺也 是邦の一
里一萬二千九百六十尺と清の五尺五寸とて刻ハ二子
三百五十六步二尺とあると云ふ六十六歩の一里とて
也 本邦十里ハ清六十五里百六十三步三尺五寸也

本邦百里ハ清六百五十四里百九十六步二尺也武備志
日本道里と載て名十里而有百里と云ハ此大敷と

考 風俗通云一里三百六十步公羊傳註疏
三百步輟耕錄二百四十步是 亦邦里

數の一里ハ 七千餘步也又天竺
智度論云由旬大者八十里中者六十里下者四十里名義
集云印度國俗乃三十里今本邦里數と又按清地理
以計之一由旬ハ乃二十四町餘あり 考海路更數論曰針家の説ハ水程ハ無里鋪只以更數
定遠近耳一更天約早程六十里也と云ハ是唐山舟人

の常ニ針簿ヲ據リ諸所遠近ノ更數ト定テ航海の準
則トシ之の術也此一更程ハ十里と 本邦の道程ハ約

七里有奇ハ南より嘗元明の算書と閱と云ハ凡一
里乃長一百八十丈人行ハ約て一千歩也と云ハ

是ハ魯般尺と用るの數也 魯般尺一尺乃長ハ 日本曲
尺九寸一分六厘七毫有奇也 故子西土唐山の一里ハ 日本曲尺百六十五丈

南より 日本一里の總長千四百零四丈也 六尺五寸為
一里の間六十間 為一町三十六町為 於是右の百六十五丈ハ六十里と

一里の積と云 乘一萬九千九百丈と分ハ是と分四百零里と以除
約とれば即唐山の一更ハ 日本七里零五厘一毫二

絲ハ忽有奇かふふと得也今唐山諸島の事を
 と測^シ度^シ乃標準と求^メ唯五島より長崎に到^リの更
 數及用針の方向等と詳^シ合參^スふのおお^キ依據^ト
 かし夫唐船の長崎港に到^リ五島の南角より又
 針と用^テ約五更^ノとして收^メ入^ルと^シ乃其直程^ヲと計^ス
 日本里數三十五六里の海路也是則一更七里餘を以
 て五更ノ距故^ニ五七三十五里乃數^ニ符合^セり^{五島地}
 常^ニ五島よりして到^ルお^と四十八里也と^シ然^ルも^モ
 小艇^ノとして行^クるの海路^ニ唐船直行^スるの海路^ト
 おれ^ル
 かし

土宜

蕃名フリユクトバーレント^豊ヘツテゴロント^地
 シカラプレラント^凶マゲルゴロント^瘠
 凡^ソの各田^ノ亦^シ夥^シし天^ノ狭^キ田^ノ長^ク田^ノと^シは^ハ天^ノ
 子の御田也始^テ稻種^ヲと殖^スる齋^ノ時^ノの良^ク田^ノ小^シて伊^ノ勢^ノの狭^キ
 長^ク田^ノの^ノが^ノ是^也狭^キハ農^ノ事^トと佐^トハ是^其張^本不^レ
 後^ノ名^ノ字^ヲ佐^ト多^ク長^ク又^シ出^ル雲^ノと^シ五十^ノ狭^キ田^ノは^ハ五十^ノは^ハ
 濃^ク有^リの辭^ヲかれバ神^ノ田^ノより名^ヲつけ^ル風^ノ土^ノ記^ノ小
 ハ神^ノ須^ノ佐^ノ能^ノ衰^ノ命^ノ詔^ヲ大^ノ須^ノ佐^ノ田^ノ小^ノ須^ノ佐^ノ田^ノ定^メ給^フ須^ノ佐^ノ
 とハ尊^ノの御^ノ号^ヲは^ハ依^ルと^シ神^ノ功^ノ卷^ノ子^ノ御^ノ心^ノ廣^ク田^ノ御^ノ心^ノ長^ク田^ノ

亦上田とかりしむらう一乃田地今ハ上中下の等大ニ変
 遷りて去るべし又本花開耶姫 天孫と本藩竹屋の
 宮里めて降誕ゆいませし時收小定田號曰狹名田以其
 田稻釀天甜酒嘗之 甜酒ハ古事記傳又古ハ味の旨物と
多米といふ事並ニ延喜式姓氏録
 等よる又用淨浪田稻為飯嘗之といふ亦と何ぞ小定田
 ハトとなして稻を取つて今の大嘗會の縁起たるを所謂
 誕生賀などいふ亦と亦是より権輿より狹名田とハ後
 又真田と書りおとく其稻を依ハ之農功といふ 履中
紀ニ
 狹名來田蔣津浪田とハ沼亦矣と云辭ふて沼弟びどめ
 津命あり おとし浪田ハ名田りり今阿多那干野田間といふ所ニ

京田あどいふ交名いり古のまじりたりべし凡田ニ桑の
 名と呼て字といふ西土ふてと田名と字稱といふり神
 武卷ニ皇師立詰之處謂猛田作城處曰城田僵死枕臂處
 呼頰枕田とあるの義ハ生地後ニ開墾して遂ニ其田の
 字稱といふ也 或曰豊前ふて字のこととホノケ
といひ畿前ふて月種又キと云 其後
 聖仁の御宇始て大倭の屯田と号ふ其官曰屯田司
 是より諸国皆屯田何ぞ所謂公穀正税の御田とせり 詳
 類聚國史屯田部ニ載る今諸州の地 延曆十六年以屯
 名ニ三田富田ふどいふ其故址なり 按字典兵耕曰屯田周禮有
田稻賣與貧民以救之勸農也屯部今曰屯田司○事物紀
 原屯田蓋起於漢 延喜の御時ニ屯田諸国正税の外ニ位
 武開西域之時也

又養と用まは成実多く用おぐれバ少きものの中田と
 次又淤泥ドロおして常よ水溜ツミの地と下田と凡是早ハヤ歳
 るは宜きごとくなまどと多く登る守又陸種ツキ播ハク一が
 しくむ利益リキ益セキきぐ故あり下田の事と万葉は下田と
 云今名字は次田河色或曰俗は徒耕と云後田功と
きより出し也今横薩摩國新田宮藏建仁三年八月文
献新田宮并五大院田肆拾町事依為沼間田追年不令満
作仍為撫民所施行段別一斗五升代也ある凡田地
俾り下田ゆゑ任郵の為段別と充給しあるあり
 の位上と下とハ位うごう使中と下と凡他人の力み
 けり申ハ上の出来といく下ハ申の出来方と取実
 おとらぬやうに作り出さるハ地は習ふるハありけ

他手の覚悟は在り一暇位は地と同様は出来とま
 ハ申下の田地ハ一入心と用て作り置上下と位ハ替
 まるとえ来同一地おてあかるとよく作り置自由ふ
 ると上地と一用あるゆゑふ村後の田と位の下とま
 バカと争して水と引人一度り後二度も入ぬま
 バ下田と上田とるるとなまバ已まくの勤るとは
 めざりとも作りとも置置一且上田ハ無多くて換ふれ
 どと上田ハ價高きれば高よ置けりて求るあり下田ハ
 無事の刻と少く入して地色直れば取納帳計けりて
 而姓の勝手ハ下田下と田よとつとて手同様と情ま

阿ノ東南西ニ向ルハ尤ノ路ノ村落ハ丑寅又山
 也負シ南面ルヘテ村ノ汗泉沙ノ便カク分所ハ田畑共
 又ヨリ田畑の他地ヘ村落キテ漸クト他地全所一取
 と造るヤリト指引を色一若他場ヘ迂路ホド何ノ直
 又ナリヤリト道場ホド一登バ安藝國の道路ハ直ニ肥
 後國の道路ハ迂リ人馬の往来セ計るヨ俗ニ言フと弦
 との損益ナリ○村ニヨリ畑とくふくて百姓苦むハ
 阿ノは田の畦と廣クヨリトセ菽荏荳荳時々ヨリ
 治田の畔ニト宜一固本録曰上田の地ハ白黒赤及ハ沙
 嵐色等の墳土又洲渚土の類ナリ出雲風土記ニ稻田之

勝ト云々ヨリ中田ハ小礫雜ル沙の過る等流土ナリ
 下田ハ塔垣強垣沙多土多ナリ 農書曰土地ニ及ルヨ多
 多ト云々ヨリ又米木の盛長ト色ト云々又石の色田土の輕
 重様々ト云々又米木の盛長ト色ト云々又石の色田土の輕
 地の味味ト糞と取所の乃路の赤也都邑の途道海河船
 渡りの便牛馬の糞物等又云々ヨリ今按周禮司稼辨五物九等淵鑑
 の村里ト云々ヨリ以カクヨリ多ト云々ヨリ今按周禮司稼辨五物九等淵鑑
 下の位ト云々ヨリ今按周禮司稼辨五物九等淵鑑
 類函云五物五地也
 九等謂駢剛赤緹云

陰田 万葉集○又田稻と竈トといハ凡此間の人傳少
 田ハ私田也ト云リ

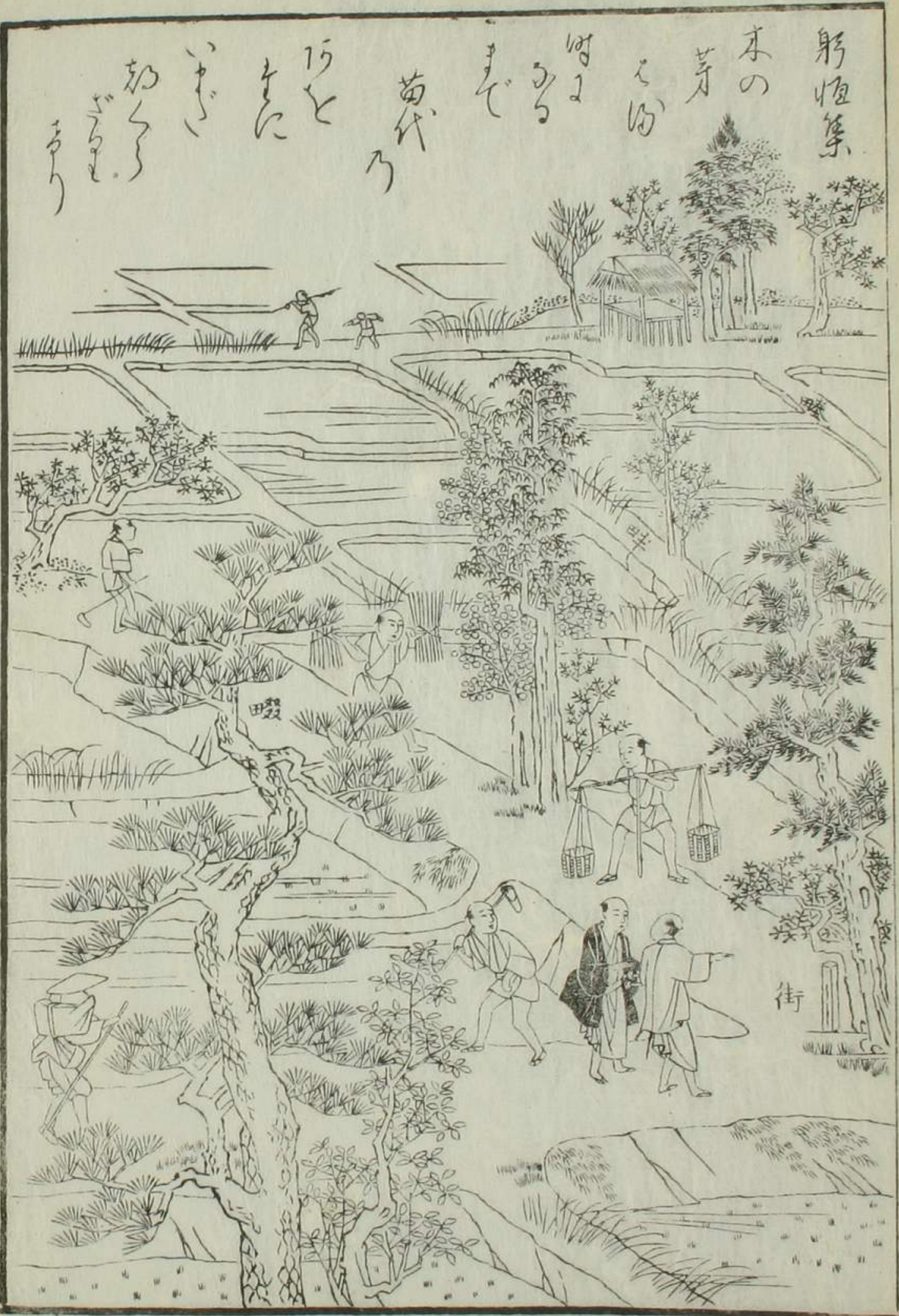
隱田 鑑 東 隱地 坪移

隱田 羨田 以上文獻通考羨 隱租 經國 移坵 明律移
ハ阿まふと訓 畧 雄畧 坵 換段
 蕃名不詳

凡按田して縄と引字と入るといふは民田の隱地と改
 の紀が為あり民部式曰凡隱首括出者主計察載功過帳
 申省省押署進官得度除帳者移主稅察不申省又室町日
 記に御領の百姓等亂逆より數年の年貢と寺内は隱
 便ありふと見えざる是と隱米と唱へり又坪移とい
 ふふといふ隱米おのまの無き田所と地のまは田ま
 たりとつゝ其罪亦隱田におれしおの所謂挿藏是
 たり人の田を奪ひ己が田札と立て相争ふといふ和訓

栗曰今の人の看場名碑ふとふと留り
凡種田者立碑概於田側書某社某人於 隱地の科律ハ和
上社長以時點視碑概ハ即田札あり 漢共二重より建武二記詐欺官私輩事或以不知
 行之地稱當地行或冒名當給人号闕所掠賜之皆是朝議
 之煩諸國之奸職而由斯不可不誠乎明律宗志に首隱田
 とつゝハ隱地の訴人といふとあり 明律云如隱田一
石隱下五年該納五石皆徵入官此謂之依數徵納也○清
律云凡欺隱田糧脫漏版籍者一畝至五畝笞四十每五畝
加一等罪止杖一百又曰里 長知而不舉與犯人同罪

阿 古事記○
即田畔也



躬恒集
 本の
 芽
 へゆ
 何よ
 みる
 まて
 苗代
 り
 巧と
 きた
 いま
 ねく
 ぶら
 ろり

久呂

和名 鈔

田乃界

界 嗟

○畔 說文畔田畔也○左傳為政如農之有畔○淮南子黃帝治天下田者不侵畔漁者不爭隈

賜 說文 田畔

○蕃名シケイテハツト

○阿久物備之辭盟他等の如く久呂ハ俗ノ物の邊郭
 と久呂利と一洗と轉るべし阿ハ右名あり久
 呂ハ今名なり此ものは田地自他ノ界由急田の畔ハ双
 方ノ中手ガシヨリトウチト禁ルモノト生滋トウチ
 ハ邊あり難ノノあり 後水尾帝大御歌ト阿久ハ
 であつ山田の畔なりやこりれまかり尋言や按
 二諸書阿ハ阿世の畧ありと注や一とのハ和名鈔一

波多波多計ハ陸田の惣稱水田子對ハ干田の義也
波比計ハ土毛の謂と注セシハ毛ハ生と通ふ辭あり
通音計ハ生植者に係りて食凡地ありて可食の物生る所
土毛ハ生植者に係りて食凡地ありて可食の物生る所
と計とハ生植者に係りて食凡地ありて可食の物生る所
とハ皆波多計と稱一正周て書紀中ハ曠と波多とも波
多該とも又畝とも苑とも並に波多計とハ訓しあり類
聚國史子鎮祭高畠陵又延喜大學式子山城國久世郡畠
一町永為菜圃園地源氏談松風卷淨莊の田はくけあどい
ふの荒地ありあくば空穂後君者てうだふはあどの
方は志とみのもととまでたふにつらきりぬ乃人うへ
下畑とをとりてはけと化るあどあり一説ハ波多は

治田也古ハ墾耕する波利と云ふにともむこハ西土
少てハ耕種と云ふの地ハ陸ともハ田といふと
くたとハ國什あどハ藍畠麻畠あどはと波とハ
藍田麻田と云ふとおれし又易蒙引云西北方可種五
谷之地皆謂之田南方之人指有水種稻者為之江南の俗
ハ稻田と云ふ田と稱せり凡いみしハ朝小陸田ハ多
く布とのりあり粟田豆田麻田園田あど是也
淺茅せと云ふおれし麻田後ハ麻生と書又特
布と書りハ深きり園田は是園と云ふと云け園のあはら
る多畑ハ火田の二合字あり漢語鈔火田野老傳云橫截
山作畠謂之截幡其先燒後耕謂之燒幡
幡ハ截幡燒幡の
幡ハ截幡燒幡の

宇禰書紀○
即畦也

宇奈冠緯

畦音攜亦作曠集韻菜畦○史記千畦薑韋昭
注畦猶壠○克己銘私為町畦注畦田隴也

蕃名アツケルホーレンス

宇禰ハ殖根の義といへり一説ハ田根の轉也垣根ふと
いふとおれ一按ハ陸田の阿母あり田ハ阿母といふ園
ハ宇禰といふ木のりく別阿母又畝と宇禰といふ
ハ地の小高きふく園の壠畦と似たり書紀ハ畝丘宇
禰乎といふくは是水田の畦とハ各別なり爾雅畝丘注
丘有隴界如田畝釋名畝丘丘體滿一畝之地也○詩南東

其畝朱注畝壟也王安石云畝大抵以南為正故曰南畝

宇奈天和名鈔○
即畛也

畛音軫正字通井田間道也○
周禮十夫有溝溝上有畛

蕃名パイデイ

畝手あり手ハ道あり万葉道のよと道の長手と云復
中紀四年掘石上溝又豊後風土記菟名手臣あり

多美増古事記○
即溝渠也

畝亦作畝訓字典疏通流注皆曰
畝○和名鈔引陸詞田中瀨也

蕃名コトパンレイストアツケル

と一晝夜百荷の湖ウミあて塩四十俵とけり淡百枚十人
多増とつふ冬何方とれおれとついで然共水ミヅ年早トシ歳
おて其等則と斟酌ナラシをなすふとけり西土ハ海邊に地多
るれハ塩むて少く常ニ雞豚トリブタの糞フコ貯て塩梅となせり
故ニ羨吸ミヤスとめ味甚いぢとけり食とくはまぬとけり
縄人恒ニ語まる明清律とぞと續て知包一諸侯とぞに
水精塩一升と賜ふなぞとついで大判金拜領とぞの規模
りふ事なり是もとぞ皇國ミクニ人ハ常ニ魚鹽イシホの味と不
足なくけりけり賜の恩頼とおりとけり事れとぞ也
本藩類姓郡塩屋村は塩土老翁の遺墟イナとぞ今ニ到り一
村の民塩と賣と業と一毎歳ニ枚聞神社イナ白塩と賣と

也因其塩稅と或曰塩淡ハ其玉の山林よりとぞ村本新
今ニ免さゆ也
給タラぎ淡付その淡と減シラ以盡ツクきに塩戸シホとぞの行つけの爲
新田ナメ子成ナメ一し塩淡五百石の人ハ田地千五百石子入て
餘何り塩淡シホもけ人多く入イむ故也西土ハ塩淡シホ今
雙フタづ凡福建川フクケン官鹽シホと載て運漕ウネウネとぞ
石粉イシコとて一ヒト苞ツボの積ツミ入イるの五イ十ジウ隻シツハハ河カ引ヒキしシやヤらラおオし
並ナラびビとト一ヒトつツくクのノ大ダイ字ジとト手テ摸モしシ路ロ引ヒキとト秤ハカリとト受ウケ取トルとト者モノ假カ令シ
量リヤウ入イ入イ仕シ券ケンとト加カてテ投ナゲとト帳チヤウとト監カンとト官クワンとト受ウケ取トルとト者モノ假カ令シ
照シヤウ例レイとト勘カン定テイにニ紳シン人ジン親シンとト盗トウしシ券ケンとト監カンとト官クワンとト受ウケ取トルとト者モノ假カ令シ
市シ及キふフとト仲チュウ人ジン親シンとト盗トウしシ券ケンとト監カンとト官クワンとト受ウケ取トルとト者モノ假カ令シ
浮島塩竈ウキシマシホ鳥海三箇社ウツシマシホ凡ニゆユ塩シホ枕マクのノ浦ウラとト六ロクとト朝アサ野ノ羣グン載サイ陸奥國リクオク

陸奥風土記
 曰宮城郡塩
 竈神社圭田
 五十六束所
 祭塩土爺也
 推古天皇
 二年甲子七
 月始
 奉圭
 田行
 神事
 式祭
 等有

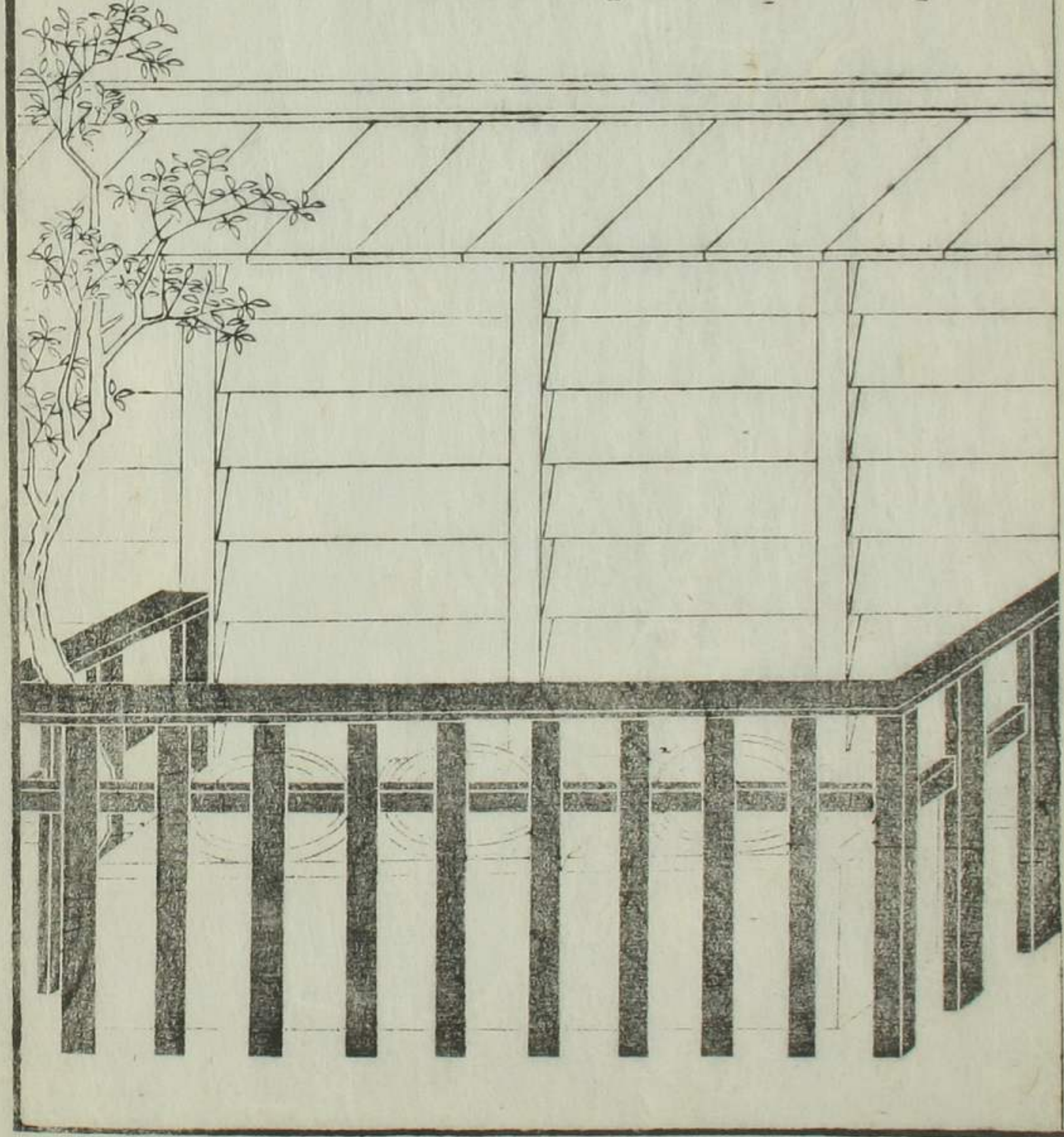


神家
 巫戸
 等凡
 當社
 日本
 无雙
 之勝
 地也
 松
 高隣
 塩竈
 浦
 以為
 尤右
 之美
 景矣
 凡朝
 吟暮
 嘯之
 佳境
 未
 有
 過之
 者



成形圖說卷之二

觀迹聞老志曰
 神竈凡四口在
 南方者二口東
 竈徑四尺八寸
 西竈徑四尺在
 北方者二口東
 者四尺八寸西
 者四尺八寸有
 國殃則釜中水
 色各為變或紫
 或黃或赤或青
 其色不同於是
 恐妖孽之兆而
 祈之
 此水以七月
 十日味爽以
 新水而易舊
 水以此為例



觀迹聞老志曰鹽竈神社在鹽竈村去多賀城址十八町慶
 長十二年黃門君修造之又以貴船亂宮祀于本社東元祿
 六年以武甕槌命為左宮以經津主命為右宮皆南嚮岐神為
 是宮西嚮合稱之為陸奧國一宮正一位鹽竈大明神白石
 源氏曰太古二神男名宇比地迹女名須比智迹宇比地迹
 猶言煮海須比智逆猶言煮鹹也蓋二神始為魚鹽之利以
 贍民用故名宮城郡有美稱則二郡所祀宇比須比神志波
 即鹽也彥姬古男女之墟而此地則醜戶所祀宇比須比神是
 也而宮城郡乃所都之墟而此地則醜戶所祀宇比須比神是
 鹽竈神社也其有二祀配以子女神也其別宮猶鹿
 島香取有御子神社乃神之孫亦不可知也

湊田 神樂 沼田 澤田 川田 田
 沙田 經國雄畧沙田俗子耽田江濱出沒百姓隨沙漲而田
 田 文獻通考近年瀕湖之地多為軍宗侵據累土增高長
 田 隄彌望名填田又湖田多為軍宗侵據累土增高長

成形圖說卷之二 三十九

大鏡曰純友ハ西國の海より川くそとなく大鏡と懸志
 らずあの上ふ土とふせしてうゑとたわし四方山の田
 とぬり任つるまゝたむらるの軍まゝすむくもなく
 かりゆくとかくかく構て討てまりをばはいしきき
 あるとあるかやうよ水乃上よ田と構ゆる事農政全書
 まこと尺えふる

塗田 田書○農政全書云夫低水種皆須塗泥然瀕海之地
 復有此等田法其潮水所泥沙淤積於島嶼或墊溺盤
 曲其頃畝多少不等上有鹹草叢生候有潮來漸惹塗泥初
 種水稗斥鹵既盡可為稼田所謂瀉斥鹵兮生稻糧盈邊海
 岸築壁或樹立椿楸以抵潮汎田邊開溝以注雨潦旱則灌
 既謂之甜水溝其稼收比常田利可十倍民多以爲永業又
 中土大河之側及淮灣水滙之地與所在陂澤之曲凡潢汙
 涸巨壅積泥滓退皆成淤灘亦可種菽秋後泥乾地裂布掃

麥種於上其所收比於田之効也夫塗田淤田各因潮漲而
 成以地法觀之雖若不同其收穫之利則無異也○又青州
 府志云海上海原隰之地皆宜稻播種苗出耘過四五遍
 而坐而待穫但雨暘以時每畝可收五六石次四五石秋收
 見戶春采買遷得高價可比魚鹽農業全書云斥鹵の濱田
 と田地となく後を先水稗とて急蠶豆とて急本綿と
 う急よく潮の氣ぬりして後作る急さよ
 凡海灘より新田と築展は海底より多の大松樹と沈て根係
 とし米らとなく巨小石と打累て然其上小石堤と疊
 其根と海の方小をく廣く施て上より斜に築けり
 て海突ふどの時濤先の沿へゆるやうあつき候をさか
 甲常の如く小壘を母にけさ立ふバ激浪より南へきて漸
 漸と石動て壞るべし因ていりしる海邊の新田は多

く大風津波の時におこされて数万の費と一時は威い
ふと河原備前國岡山の村多明神といふは昔時
津田某が海に沼る地は十萬石の新田と開き一時人柱
かゝるは事漸くくはりてはたつとては婿
かゝるくは生て益をさ身なれはては清て人柱となり
て海に入るかまきぬり其新田成りて後地主の神
は初りありと也女時人傳に記しぬいふ一とく
係例もど國の史もく見えれど縦十萬の田地と得
とくといりて人柱やハ立居と信らるるは是國
此事を彼國人もすは百年前の事也備前の海幸三里の

申は津田某新田と築出せ一時は始新田場より一里許
乃沖に檣を建て大索と三重作りて水に大筏端と縦く
に掛あはつて是のさへ迄所の山丘を崩して濱岸を埋め
岩石と契て渠澮を通しとせしは宵は大索の竹もハ
きぬぐ竹木の枝葉どもおのれと川柳りたるとそま
新田の波打涯を立せしは三里の渚さながら難と
結ゆしはるるは是にて湖鼻を成りて石堤と築立
しとて大索に舟輪を掛しハ浪をぬられてはたきあ
やうの爲なり又川筋の堤を高くし是所は閘門を他て
其啟閉と轉転して上下して水と括引ぬるはどに今

成形圖說卷之二終

